

[ソーシャル・マジョリティ研究]

4 リレーコラム： ソーシャル・マジョリティ研究 事始め



以下には、すでにソーシャル・マジョリティ研究を開始した人文社会科学系研究者たちのコラムを掲載する。執筆者は、社会学、言語学、認知科学等を専門とするいわゆる「専門家」である。しかし、自分の専門分野だけを淡々と研究する人々ではない。彼らは「ソーシャル・マジョリティ研究」の誕生とその息吹きに共感し、当事者からの声を心待ちにしている「一歩進んだ専門家たち」である。残念ながら、ここに情報処理を主たる専門とする人物はまだいない。本小特集が情報処理を専門とする人々に何らかのインスパイアを与えてくれることを期待している。

1 感情的である〈私〉と、 感情を持つ「私」

—身体で分かることと言葉で分かること—

澤田唯人 (大妻女子大学人間関係学部共生社会文化研究所)

catadatowl@gmail.com

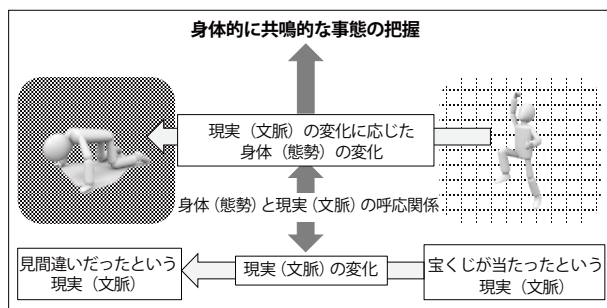
大妻女子大学共生社会文化研究所・特別研究員、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程、日本学術振興会特別研究員を経て現職。リストカットなどの自傷行為を生きる人々への継続的なインタビュー調査から、感情と行為に関する社会学的研究を行っている。

発達障害など、他者との感情のやりとりで困りごとを持つ当事者からは、多数派の人たちが、その場に合った感情を何の困難もなく抱き、表現しているように見えるという。それもそのはず。実はこの社会には、「こういう状況に置かれた人は、このような感情を抱くだろう」という多数派基準の感情をめぐるルールが存在し、人々はこの「台本」に即してその場における自己や他者

の感情を理解したり、場合によっては演技をしているのだから(例：お葬式は「悲しみ」という感情を持つべき場面)。

とはいえ、こうした言語的なレベルでの台本の通りに、いつも多数派の身体も、感じたり動いたりしてくれるわけではない。たとえば、仕事の会議中なのに、宝くじの1億円の当選を知った男性が、思わずとび跳ねて喜んでしまったとしよう。なぜ人はそうした場にそぐわない〈感情的な身ぶり〉をしばしばしてしまうのか。それは身体が、その人の生きる現実の変化と呼応し、自らも一体的にその〈形＝態勢〉を変えることで、事態の意味を身体的にも迎え入れようとするためである(もし当選が見間違いと分かれば、今度はがっくりした態勢をとるだろう)。では、とび跳ねて現実の変化を迎え入れるとは、この場合どういうことだろう。あるいは彼はとび跳ねてどこに行こうとしているのだろう。もしかすると、彼は時間をとび越えて一生懸命に「未来」へ行こうとしているのかもしれない。1億円が当たり、「現在」にいてもたってもいられず、早く早く「未来」に行きたい。だからピョンピョンとび跳ねてしまう。そうすることで、彼は1億円が当たったという現実を全身で迎え入れようとしているのだ。

このように、感情をめぐるコミュニケーションに困りごとを持つ当事者からの問いに導かれ、そこから見える多数派の不思議な世界をともに研究することは、社会という演劇を成り立たせている「台本」の存在や多数派の人々が即興的に体现する〈感情的な身ぶり〉の持つ意味の不可思議さに気づかせてくれる。この社会という舞台の上では感情を生きれない／生きづらいという感情を抱かされる人たちの「なぜ？」に、ともに応える研究が今はじまる。



■ 図-1 身体（態勢）が現実（文脈）の変化に応答する
(初出：文献1))

2 発声と発話の仕組みって どうなっているの？

藤野 博 (東京学芸大学)

hfujino@u-gakugei.ac.jp

東京学芸大学教職大学院教授、東北大学大学院教育学研究科博士前期課程修了。博士（教育学）。言語聴覚士。専門はコミュニケーション障害学。著書に『コミュニケーション発達の理論と支援』（金子書房、編著）などがある。

「私は話すときにいつでも声が大きいと注意されます」「話していると時々、息ができずに窒息しそうになります」。これらはコミュニケーションに困難を抱える当事者の声である。話をするときに、話の内容には意識が向いても、話すことそのものに意識が向けられることは少ない。たいていの場合、話す内容が定まれば、あとは「自動運転」にまかせることができる。しかしその「自動運転」に苦労している人たちがいる。

話すときに「自動運転」で行っていることとして、呼吸、発声、構音、聴覚フィードバックなどがある。中でも聴覚フィードバックは流暢な発話に密接に関係する機能として研究されてきた。騒音下で話すと声が大きくなる現象であるロンバール効果、自分の発話をわずかに遅らせて聞かせるとうまく話せなくなる DAF（Delayed Auditory Feedback）効果、自分にとって不必要な音を脳内で消去する聴覚ゲーティング機能仮説などはいずれも聴覚フィードバックの問題である。「話す内容を意識すると、声

の大きさなどをコントロールすることがとても難しくなるという感覚を持っています」といった発達障害の当事者が訴える発話の困難さには、聴覚フィードバックの問題が関与している可能性がある。

予測と異なる情報を感知し、違和感や異変を受け取ったときに修正するフィードバックの働きがスムーズな発話を支えている。そして、多数派の人は微細な違いを大局に影響がない情報として振り落すが、それをスルーできない繊細な感覚を持つ人もいる。自分の話を自分で聞くことにはさまざまなスタイルがあることが示唆される。

3 聴覚の「中次」処理

古川茂人 (NTTコミュニケーション科学基礎研究所 人間情報研究部)

shigeto.furukawa.ne@hco.ntt.co.jp

1991年京都大学工学部卒業。93年同修士課程修了。96年英国ケンブリッジ大にてPh.D.（実験心理学）取得後、米国ミシガン大学博士研究員。2001年現研究所に着任。現在、同研究所上席特別研究員。専門分野は聴覚心理学・生理学。

コミュニケーションの困難を訴える当事者には、聴覚の悩みをかかえるものが多いという。ほかに物音があるとき、声が小さいとき、言葉の滑舌が悪いときには特に会話が聞き取りにくいというし、音に過敏に反応する、音の来る方向が分からないといった問題もある。それは何に起因するのか？

一般の人が聴覚を語る際には、音の情報を神経信号へと符号化する「低次」の処理（いわばミミのはたらき）と、そうして得られた情報に基づいて意味・内容を認識する「高次」の処理（いわばアタマのはたらき）とに分けて考えがちである。しかし、一般的なミミの検査（聴力検査）でもアタマの検査（知能検査）でも多数派と変わらないスコアを示す当事者は少なくない。

日常の複雑な音環境の中で我々が生き抜いていくためには、ミミから送られた信号をアタマが理解する前に、適切な音響特徴を抽出し、音源ごとにそれを整理・選択し、必要に応じて欠損した情報を補完

する処理が必要である。当事者からの訴えは、低次のミミでも高次のアタマでもない、この「中次」のメカニズムの問題を暗示し、その重要性を多数派にも気づかせてくれる。

その処理機能の鍵を握ると考えられる脳幹は、皮質下でありながら多段階・並列的・双方向の複雑な神経情報処理を行っているほか、現代の脳イメージング技術では十分に観察することができない。聴覚医学的な空白地帯でもある。当事者の訴えにあらためて耳を傾けることは、彼らの困難を理解・解決するだけでなく、この隠れた中次メカニズムの解明にもつながるステップにもなるであろう。

4 会話における「3人目問題」

坊農真弓（国立情報学研究所／総合研究大学院大学）

（正会員） bono@nii.ac.jp

2005年神戸大学大学院総合人間科学研究科博士課程修了。2009年より国立情報学研究所・総合研究大学院大学助教。2014年より同准教授。多人数インタラクション研究および手話・触手話・指点字を対象とした相互行為研究に従事。博士（学術）。

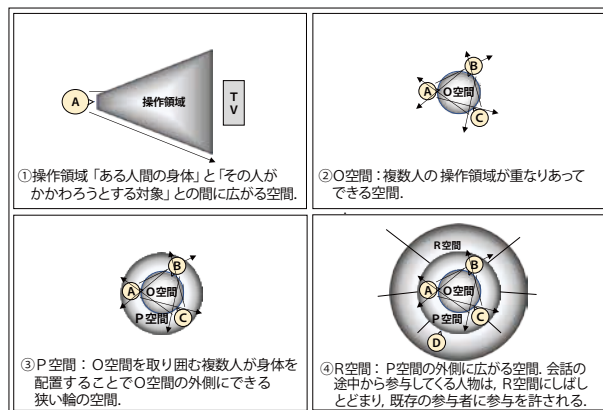
すでに会話をし始め、ある程度盛り上がっている2人の間に入っていくことは、誰にとっても難しい問題である。この問題を「3人目問題」と呼びたい。3人目問題を説明する理論に Adam Kendon による「F 陣形システム」と Erving Goffman による「参与枠組み」がある。F 陣形システムとは、人々が集まって会話している場面を外からビデオカメラで撮影して、その形状や輪郭を解釈する理論枠組みである。一方、参与枠組みとは話し手と聞き手の会話への参与の度合いを議論するための理論枠組みである。F 陣形は空間的な度合いを記述するもので、参与枠組みは連鎖的な度合いを記述するものである。

複数の人々がともにいる場面において、我々人間は「空間的」「連鎖的」な参与の度合いを瞬時に判断し、自ら行動をデザインしている。冒頭で挙げた、す

でに会話をし始め、ある程度盛り上がっている2人の間に入っていく事例に対し、観察的な説明をするならば、『空間的に「近づき」「とどまり」「相手の注意を得る」といった手続きによって、会話への空間的参与が達成される』。また、『いま話している人物の「発話が誰に向けられているかを察知」し、それに合わせて「自分の行動をデザインしていく」ことによって、会話への連鎖的参与が達成される』となるだろう。

これらのいまだことばを発しているわけではない人々の会話への参与の度合いを記述可能にしたのが、F 陣形システムや参与枠組みであるといえるだろう。言語学をベースとした語用論的な理論では、ことばを発した人物の行為を記述することを基本姿勢としてきたが、言語学のみならず、社会学や心理学の中からできあがってきたこれらの理論は、私たちの日常生活を支える会話の周辺的現象を扱ってきた。

誰もまだことばを発していない段階で、マジョリティが参照しているルールや情報があるという事実は、マイノリティに属する人々の会話参与をより難しくしている。これらのルールや情報をコミュニケーション研究者が言語化したり、情報学研究者がセンシング技術や機械学習技術等で感知できるような仕組みを開発すれば、マイノリティに対する新しい支援の在り方が提案できるかもしれない。そんな未来を実現させるために、人文社会科学研究者と情報学研究者のコラボレーションはどの時代も欠かすことができない。



■ 図-2 F 陣形システムの4つの構成要素（初出：文献1）

5 普通であることについて

浦野 茂 (三重県立看護大学)

shigeruu@blue.ocn.ne.jp

慶應義塾大学大学院後期博士課程単位取得退学。博士（社会学）。
三重県立看護大学教員。おもな編著に『概念分析の社会学—社会的
経験と人間の科学』『概念分析の社会学 2—実践の社会的論理』（い
ずれもナカニシヤ出版、共編著）。

「普通である」という表現は人や物の様子を記述しているが、それと同時にこういったさまざまについての評価も行っている。その評価の具体的な内容は状況によって「望ましい」とか「まずまず」とさまざまだが、この表現を記述に用いながら私たちは同時に評価も行っているのである。この意味で「普通である」とは、倫理学者 Bernard Williams の言う「濃い倫理的概念」の1つである。

したがってこう言える。ともするとこの表現が向けられているのは人や物そのもののように思えるかもしれない。たしかに普通であるのはある人や物だったりするのだから。けれどもそれらを評価している以上は、そのための具体的な状況が欠かせない。この状況においてこの人や物はどうなのか、と。そしてこの人や物を「望ましい」ものだったり「まずまず」にしているのはこのような状況なのである。つまり私たちが評価を行うとき、こうした具体的な状況に置かれた人や物の意味をめぐってそうしているのである。

ではこの状況とは何だろうか。私たちが人や物とかかわるのはつねに具体的な状況の中においてである。そしてその状況は、周囲の人や物の配置、振舞いなどが何らかのルールによって組織されることで成立している。私たちはそれに基づいて行為し評価され、また人の行為を評価する。「普通である」とはこの評価にパスしたこと、そして「普通でない」とはそれにしくじったことをそれぞれ意味している。「普通でない」ことはこうやって可視化され、括り出されることになる。

だから普通の人とかマジョリティとは何か、普通でない人とかマイノリティとは何かと考えるとき、人そのもののことについて考えることは的を射ていない。なぜこの人はこうなのかと、その人の皮膚の内側について考えたい場合も同様である。かりにそのような内側を覗けたとしても、そこに見つかるのはたとえば認知機構の一連の働きという事実すぎない。そして事実そのもののうちには「普通である」とか「普通でない」といった評価にかかわる意味を見つけ出すことは不可能である。

そんなことをするよりも必要なのは、むしろ人の置かれている状況に、あるいはそんなことを考えたがっている私の状況の具体性に目を向けて問うことである。そのような状況は実際にどのように組織されているのか、そして状況をどのように組織しなおしていくことで普通の暮らしを実現することができるのかと。

社会的場面の細部を観察していくことの意義を1つ挙げるとするとこう言えるように思う。

6 会話のルールの一般性

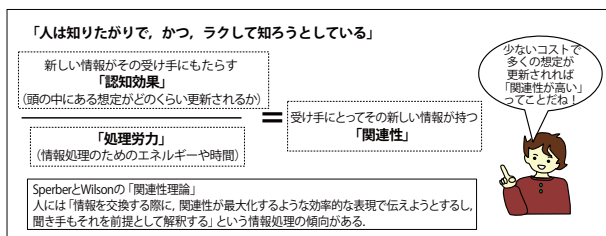
浅田晃佑 (白鷗大学)

asada@fc.hakuoh.ac.jp

白鷗大学教育学部准教授。博士（文学）・京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。専門は発達心理学。自閉スペクトラムなどの発達障害がある人のコミュニケーション特性・身体特性を研究。

言語学の一分野に、語用論という分野があり、会話の中にどのようなルールが存在しているかが研究されている。Grice の協調の原理や格率、Brown と Levinson のポライトネス理論、Leech のポライトネスの原理、Sperber と Wilson の関連性理論がそれに含まれる。以上は、コミュニケーションにおいて、情報伝達を効率良く達成したり、人間関係を円滑にしたりするために、どのようなルールが存在しているかを言語学者が考察し、まとめたものである。

これらは、文脈をどのように理解するかということとかかわるが、それには、前提知識、どの情報取得するかという注意、前提知識や取得した情報をもとに行う推論などが必要となる。発達障害がある人が同じような知識を持ち、似たような注意・推論を行うなら、発達障害がある人同士が意思疎通しやすいことや新たな会話のルールを生み出すことがあるかもしれない。以上で紹介したような語用論で提唱されてきた理論がまさに「多数派」のルールであったと考えるなら、発達障害などの個人差を考慮した（個人や特定のバックグラウンドがある一定のグループで使用される）「少数派」のルールについて今後さらに考えていくことも重要であろう。たとえば、発達障害や自閉スペクトラムがある人の中で通用しやすいルールがあるのかどうかという点である。これらのルールが、ある世代の人同士では通用しやすい世代の会話のルールやある職業の人同士では通用しやすい業界の会話のルールのように、似た人同士・会話の頻度が高い人同士で通用しやすいルールというものと同様の性質のものと考えられるのかどうか今後検討が必要である。これまで理論化されてきた多数派の会話のルールがどの程度一般性を持つのか、少数派の個別性の高いルールが多く存在するのか、など興味深いテーマがある。



■ 図-3 SperberとWilsonの「関連性理論」（初出：文献1）

7 いじめの構造

—マジョリティも対処しきれていない
「学校ストレス」への対処—

荻上チキ（評論家）

seijotcp@gmail.com

評論家・NPO法人「ストップいじめ！ナビ」代表理事・ラジオパーソナリティ。著書に『いじめを生む教室』（PHP新書）、『ブラック校則』（内田良らとの共著、東洋館出版）など。

多くの参与観察的な研究は、特異に見えるトライプの慣習をあぶり出すことを通じて、他者理解を試みるのみならず、時に、多くの人が自明視している社会的な合理性そのものが、限定的な安寧を獲得しているものの、絶対のものではないということをも浮き彫りにしてきた。「ソーシャルマジョリティ研究会」の試みは、その営みを反転させることにより、他者としてのマジョリティを当事者研究してみせよと問い、もって従来の諸研究に対して、説明体系のアップデートを求める。

私がもらった「いじめの仕組みってどうなっているの」という問いには、暗に「いじめが蔓延^{はびこ}るような教室で、人々はどのようにして順応できてしまうのか」という難題が含まれている。日本のいじめが起きやすいホットスポットは「休み時間の教室」である。そこには、ゲームや漫画といった、さまざまなコーピングレパトリーの持ち込みが禁じられており、かつ教室間の移動が許されない学校風土の中で、ストレスへの反応として「いじめ」がコーピング的に選択されやすい。マイノリティはしばしばいじめ被害のハイリスク層となるが、マジョリティも実は学校に順応しきれていないわけではない。学校ストレスそのものを縮減するため、マンパワーの補強や教育科学の共有など、地に足のついた対策が必要である。



8 ソーシャル・マジョリティ研究の2つの側面

熊谷晋一郎 (東京大学先端科学技術研究センター)

kumashin@bfp.rcast.u-tokyo.ac.jp

東京大学先端科学技術研究センター准教授, 小児科医。新生児仮死の後遺症で、脳性マヒに、以後車いす生活となる。東京大学医学部医学科卒業後、病院での勤務、博士課程での研究生生活を経て、現職。専門は小児科学、当事者研究。

ソーシャル・マジョリティ研究には2つの側面がある。1つ目は、少数派が自らの困難を元手に多数派の社会的秩序を解明する新しい学術領域という側面である。社会学者 Harold Garfinkel は、わざと秩序を乱す「違背実験」を通じて暗黙の社会的秩序を暴こうと提案したが、発達障害のある人々は日々、意図せず違背実験を生きている。多数派とのかかわりの中で彼らが直面する苦労や疑問から出発する本研究領域の方法は、違背実験をより発展させたものといえるだろう。加えて本研究領域は、発達障害を持つ当事者とさまざまな分野の研究者が、直接あるいは間接的な対話を通じて創造的に共同し、新しい

知識を生み出す「共同創造」という先進的な方法も採用している。

ソーシャル・マジョリティ研究が持つ2つ目の側面は、発達障害を持つ成人を支援するツールである。教育学者 Carol Grey の「ソーシャル・ストーリー」を筆頭に、暗黙のルールを学ぶことで発達障害の子どもたちの社会参加を支援する取り組みはすでに存在しているが、成人期は子ども時代に比べ、多様な社会的場面に合わせて別様に振る舞うことが要求されるようになり、ローカルな暗黙のルールを単に記述しただけのストーリーを学んだのでは、さまざまな場面に合わせてルールを柔軟に应用することはできない。多様なルールの背後に存在している、ある程度普遍的な規則を知りたいというニーズにこたえるため、社会学や認知科学、言語学などとの共同創造による本格的な研究所である必要がある。

学術と支援が分かちがたく結びついた新領域がここに誕生した。

参考文献

- 1) 綾屋紗月 編著: ソーシャル・マジョリティ研究 コミュニケーション学の共同創造, 金子書房 (2018).

